

演後には「もう一回やってみようか」と思いなおしてしまふ、不思議な稼業である。

デビューまで

昔から、クラシック音楽を本業とし、演奏活動によって財産を築きつつ楽々と暮らす、というのはなかなか難しいようである。現代のようなジャーナリズムとコマースリズムの発達した世の中でこそ一回の演奏会のお金をコンサティーが数百万円という商売が成り立ってはいるが、実際にクラシック音楽の世界で百万円単位のお金をコンサートのみの報酬として稼ぎ出せる演奏家の数は、おそらく非常に限られた数ではないだろう。もっとも演奏に放送や録音の権利がからんだ場合はこの限りではない。「ワンステージ数十万円」の演奏家は珍しくなく、ふだん我々がコンサートなどでその演奏に接しているわけだが、その数も全世界の演奏家人口からみれば果たして何パーセントといえるだろうか。

「オーケストラで弾いてるヴァイオリニストは弓を上下させるたびに一円、二円、三円…、て思うんだってさ。ピアノニストは和音を弾くたびに十円、二十円、三十円…、指揮者は腕を動かすたびに一万円、二万円、三万円…というわけ。それを見ていたテノール歌手がヒヤクマインエン、と歌ってんの聞いたら、アホらしくなっちゃった」などという冗談がある。

これはさておき、演奏家をジャンル別にみて、時間あたりの単価が一番高価なのは、主役級のオペラ歌手のようである。しかし歌い手はそれこそ「身体を張って」自分の肉体そのものを酷使しながら活躍しているとも言える。変声期を過ぎてみないと海のものとも山のものともわからず、その後実際に現役として活動で

きる年数も限られており、これはもっとも、とうなずけない事もない。

多少おもむきは異なるが、やはり歌手と同様、いや、それ以上に本人の身体そのものが資本であるバレエダンサーの場合、なぜかこれは案外「大したことはない」のだそうである。

あとは指揮者、そして様々な独奏楽器のソリストなど挙げだせばきりが無い。しかし演奏家の報酬がその音楽的能力によって上下するのはともかく、それ以上にその人の持つニュースバリューや知名度に左右される事の何と多いことか。どんなに優れた天才的ミュージシャンであっても、全く無名で誰もコンサートに来ないようでは興行として成立しない。もともと演奏家という稼業は多かれ少なかれある程度の自己顕示欲と自己主張とがなければやっていけないものだが、それをうまく商業ベースにのせるのはなかなか並み大抵のことではない。

古くバロック時代からの音楽史を勉強していると「宮廷音楽師」という単語が散見されるが、彼らはこの言葉のもつ響きほどは優遇されていなかったようである。「作曲家」という分化され、独立したフルタイムの職業はごく最近になって初めて可能になった。それまでの長い間、作曲家は同時に演奏家、あるいは指揮者でもあった。宮廷に雇われて色々な公的私的なセルモニーやパーティーの音楽、そして食事時のBGMなどをつかさどっていたが、果ては雇用主である王侯貴族が眠りにつく時の子守歌的なものまで作曲させられていた例さえある。アーティストというよりは一種のエンタテイナーといった感じだろうか。



もう少しあと、すなわちモーツァルトからベートーヴェンあたりの時代になると、音楽家の立場もそれまでのように宮廷の付録的なものより独立し始める。それでも貴族、つまりパトロンによる経済的、また社交上の援助は常に必要だった。その時代に彼らが披露した「高級な」音楽は、現代のように一般市民の楽しみ、というよりは、もっと限定された世界のものであった。

お金持ちの貴族に経済的援助を受け、多少なりとも生活を依存しているのであれば、当然のことながら彼らのお気に召すようでなくては死活問題にもなりかねない。ゴマすり専門の音楽家達もそれこそ掃いて捨てる程いだらうが、今日までその名の残る不滅の芸術家達も、音楽好きのパトロン連中の催す「音楽試合」なる余興にかり出されていた。これは自作を披露したり、即興演奏などによってお互いの手腕を競い合うもので、音楽家自身のメリットを考えた催しというよりは、彼らを庇護する立場にある貴族達の自尊心を満たすためのものであった。その中でもモーツァルトとクレメンティ、ベートーヴェンとクラマーの話などは有名で、今日でもその記録を目にする事ができる。

現代においてこの「競争」は形を変え、国際コンクールという名のもとに若いソリスト達のイベントとなっている。大きささまざまな規模の物を合わせると、年間少なくとも二百回以上は各地で催されているだろう。

指定されたレパートリーを準備して申し込むと、書類審査（ない場合も多い）の後、部門別に実際の演奏による数段階の予選が行なわれる。この予選を勝ち進み、本選で上位入賞すれば、そこでまとまった額の賞金を得られる仕組みである。

一位の賞金が一万ドル以上、というコンクールも見受けられる。今までの最高額はピアノコンクールの場合でキャッシュ三万ドル（一九八九年現在）というものであった。パリでの話である。コンクールによっては副賞としてピアノが贈られる場合もあるが、これも換算すればかなりな額の賞となる。ただしこのピアノ

を運良く手に入れたとしても、送料と税金は受賞者持ちである場合がほとんどな上、賞品としての楽器はむやみに転売してはならない、などという条項がついている場合もあり、手放して喜んでばかりはいられない。コンクールに参加できる条件として普通は年齢制限があり、多くの場合その上限が三十才から三十二才、歌手の場合にはもう少し遅くて三十五才程度である。この条件に適った若い演奏家達が一堂に会し、しのぎを削り合う。

コンクールを受ける事によって得られる第一のメリットは、賞金そのものより副賞として与えられる各地での演奏会の契約である。大きい有名なコンクールになればなる程その数も多く、質も良く（質の良いコンサートとは聴衆のレベルが高く、メジャーのプレスによる評価の対象となり得るものことである）、これを通じて世界でも重要な大都市の檜舞台に出ることができる。これを足がかりとして数あるマネージメントのひとつと専属契約を結ぶ事ができれば、初めてソリストとしてある程度の生活設計が可能になる。しかしせっかく苦労して多額の賞金と共に勝ち取った演奏会でも、そこで失敗し、それっきり忘れ去られてしまう事も星の数ほどある。国際的デビューを果たさんとする若きアーティストの競争は想像以上に激しく、厳しいものである。

スポーツとは根本的に異なり、本来は競争によってその優劣を決められない芸術を、コンクールという手段によって無理やり評価してしまうのは悲しい事である。しかし現代においてはこれもひとつの「必要悪」なのかも知れない。

演奏家の立場から見た場合、コンクールに煩わされることなくして世に出られるのであればもちろんそれに越したことはない。しかしコンクールで一位を獲得するための努力と、コンクールの助けを借りずに同等の地位と名声を得るまでの苦労とは、後者の方がまず比較にならぬ程大変だし時間もかかる。霞を食べて

いては芸術はできない、とは言うものの、ヤング・アーティスト達の生活内情はかなり深刻である。

暗譜の秘訣

「音楽的才能」と一口に言っても、その中には音感やリズム感などの基本的な事柄をはじめ、敏捷な運動神経その他の色々な要素が含まれるだろう。それに加え、実際の演奏活動の場においては記憶力の確実さ——いわゆる「暗譜力」——も欠かせない。ソリストとしてオーケストラと協演する際、一人で、またピアノなどの伴奏と共にリサイタルを催す際、オペラの舞台で、等々慣習や芸術的観点より楽譜なしで演奏したり歌ったりしなければならぬ機会が非常に多い。

三人以上のプレイヤーが集まって合奏する場合には、休符を数え間違えたりする事によって起こり得る単純ミスを防ぐ面からも、各自譜面を使用して演奏するのが普通である。この場合演奏者はそれぞれ自分のパート譜のみを見て演奏しており、譜面上からはどの部分で誰がどんな音を出すかは不明である。

これはオーケストラのような大編成のものでも同様で、特に休みの部分の多い管楽器や打楽器の奏者にとって、指揮者の存在は必要不可欠である。もし指揮者がいなければ、しばしば百小節以上も続くことのある休止を、その小節数だけ指折り数えながら待たなければならなくなる。

小編成の室内楽でピアノが使用される場合、ピアノストだけは全部のパートののっている総譜を使用して演奏する。ただ編成が増えれば増えるほど譜めくりの回数が多くなるのが難点ではある。ピアノの大譜表だけならページに六段はゆうに印刷できるのに、パートが増えたとページに四段、あるいは三段分ぐらいしかスペースがない。単純計算で一段四小節として、四十八小節ごとに譜めくりが必要になると二十四小